

2026.5.20.



NPOフォーラム・だより No.122

NPO法人安房文化遺産フォーラム（共同代表：愛沢伸雄、池田恵美子）

〒294-0045 千葉県館山市北条 1721-1 TEL&FAX : 0470-22-8271

Eメール awabunka@awa.or.jp 公式サイト <https://awa-ecom.jp/bunka-isan/>

会員・寄付募集中！年会費＝正会員 A:10,000 円（総会議決権あり）・賛助会員 B:2,000 円・法人 10,000 円
（ゆうちょ銀行口座：0 0 2 6 0 - 1 - 9 7 3 0 7 名義 NPO 法人安房文化遺産フォーラム）

◆ 文化財講座：旧安房南高校木造校舎の設計者をさぐる

6月27日（土）13:30～16:00 館山市コミュニティセンター第一集会室 参加費無料

講師：小島聡氏（日本建築学会千葉支所長、安房高等女学校木造校舎を愛する会 相談役）

千葉県立安房南高校旧第一校舎は、1930（昭和5）年に安房高等女学校として建てられ、まもなく100年を迎えます。関東大震災の教訓を得て、女学校にふさわしい装飾を備えた美しい校舎です。コンクリートの建て替えが進んだ1970年代に管理棟のみ保存され、後に県指定文化財となりました。しかし安房高校との統合により使われなくなって18年。私たちはよりよい保存活用を目指して、「安房高等女学校木造校舎を愛する会」を発足し、草刈りなどの環境整備とともに、歴史調査を進めてきました。



木造校舎を愛する会 運営委員ら 2026.4.4

このたび、建築学会千葉支所長の小島聡氏も共同調査に加わり、これまで不明だった設計者が明らかになりつつあります。当時は珍しい三角屋根の西洋風デザインは、同時代に建てられた安房中学校（安房高校）や千葉中学校（千葉高校）などにも見られ、千葉県技師の設計だということが分かります。こうした調査が進むと、文化財としての価値も高まります。

なお、オンライン視聴も可能です。
ミーティング ID:811 2909 2923
パスコード 775265、あるいは右の
QRコードからご視聴ください。



◆ ^{い ちよんみ} 李 政美 お寺でコンサート @きよなん 一つながる海 つながるいのち

5月29日（金）14:00～16:00 浄蓮寺（鋸南町勝山 315・JR 安房勝山駅から徒歩3分）
予約 2,000 円・当日 2,500 円（TEL090-1706-3406/090-7287-7971）

主催：チームきよなん 後援：NPO 法人安房文化遺産フォーラム

韓国済州島出身の両親のもと東京葛飾に生まれ、朝鮮民謡やオリジナル曲を中心に、日韓両国でライブ活動を展開しています。館山では、2024年のハングル「四面石塔」400年記念シンポジウム/NPO 創立20周年のとき大巖院で歌っていただきました。生前に鋸南町保田在住だった実兄の国本（李）徳雄氏は、NPO 会員で在日済州道民会会長でもあり、ともに日韓交流に尽力し、お世話になったというご縁です。



<チョンミさんのメッセージ>

一昨年旅立った長兄の終の棲家だった鋸南町で歌えること、とても嬉しいです。兄が丹精こめた手入れしていた鱧ヶ浦の家。芝生の庭には大きなトルハルバン（石のおじさん・済州島の村の守護神）2体が、海を背に今もその場所を守っています（重すぎて動かせなかったそう）。兄が残してくれたご縁がつながって、浄蓮寺さんを会場にコンサートが実現します。みなさんにお会いできること、楽しみにしています。歌で心が明るくなりますように。

房総アワビ器械潜水士たちの渡米背景をさぐる（1）

～小谷源之助・仲治郎と「金澤屋」の周辺～

愛沢 伸雄（NPO 法人安房文化遺産フォーラム 共同代表）

黒潮と親潮が出会う豊かな漁場に恵まれた安房は、江戸前の海産物供給地であり、保養地としても人びとの往来が盛んであった。

また、15世紀半ばから170年にわたり安房を治めた房総里見氏は、1614（慶長19）年の改易により家臣らは各地に離散したが、血縁地縁による強固なネットワークを継続し、明治期までも支援や情報を共有していったようである。

こうした背景のなかで、19世紀末、根本（南房総市白浜町）から渡米した小谷源之助・仲治郎兄弟は、カリフォルニア州モンレーで器械潜水のアワビ漁に成功したパイオニアといわれる。

彼らの渡米前のことはほとんど知られていなかったが、近年、大量の古文書を発見し、解読調査をおこなった。その大半は、彼らの実家の海産物問屋「金澤屋」に関する書簡や勘定書であり、次第にその実像が明らかになってきた。

彼らが渡米した背景として、金澤屋の周辺に、広く世界に関心をもち社会に影響を与えた4人の人物がいたことに注目したい。

せいきちろう ▷ 森 精吉郎

1878（明治11）年、根本の森精吉郎は横浜の増田萬吉に委託して、器械潜水によるアワビ漁の試験操業を行った。増田は日本における器械潜水の始祖である。

精吉郎は、森惣右衛門ら森一族をはじめとする支援者とともに村民を動かし、増田の革新的な技術を取り入れる採鮑業の実験に取り組んだ。精吉郎が村民の人望を集めていたからこそ、村をあげて先駆的な取り組みが成功に導かれていったと思われる。

根本は器械潜水アワビ漁の先駆けの村として有名になった。1881（明治14）年に千田、翌年に布良が続き、またたく間に各地へ広がった。

精吉郎は、1874（明治7）年の根本小学校開設時に算術の教員であり、後に根本小学校の学務委員を務め、村会議員でもあった。

11歳の小谷源之助にとって、森教師が見せた器械潜水の実験は、外国の科学技術を取り入れた実物教育として感動を受けたことだろう。

源之助の父清三郎は、金澤屋の入り婿であり、元の名は森大吉という。兄の森惣右衛門は器械潜水の支援者であり、精吉郎とは一族であった。

根本の西墓地には、森家一族と思われる墓域に「木村屋」という屋号があり、墓碑には「了知源底居士 明治32年5月11日 俗名精吉郎行年54才」と刻まれている。

この墓域には、森家大屋という家名の大きな墓石があり、墓碑には森惣右衛門の名が刻まれている。『長尾村誌』に記載のある江戸期の根本村名主森惣右衛門と思われる。

なお、里見氏の情報をまとめた『安房志』（斎藤東澗著・1908年）では、根本の森務吉という人物を「祖先森空之助義祐と稱（称）し、先代を儀兵衛と云…」と紹介している。根本の西墓地にある「森儀平家」の墓は、儀兵衛に通ずると思われ、墓碑のなかに空之輔という名もあることから、里見氏家臣団の一人と推定される。

ありのぶ ▷ 福原 有信

資生堂創業者の福原有信は、1848（嘉永元）年に布良や根本に近い松岡村（館山市）で生まれた。幼少時より漢方医の祖父に薬草学などを学び、17歳で医師をめざして上京。



西洋医学を身につけ、医薬分業を提唱し、1872（明治5）年に日本初の洋風調剤薬局「資生堂薬局」を開業した。

帝国生命保険会社や安房銀行などの創業にも関わり、広く世界を見聞して政財界の人脈を築いた。

長女とりが嫁いだ川名博夫は、館山病院の初代院長であり、資生堂が東京案内所となって転地療養の保養地と知られるようになる。四女美枝は渋沢栄一の二男武之助に嫁いでおり、館山病院二代目院長となった穂坂与明は渋沢栄一の侍医として渡米に随行している。

福原家は、根本村名主の森大屋家とは親戚で、一族の小谷清三郎とも親しく、金澤屋とも取引があった。里見氏家臣の血筋をひくネットワークにも関わっていたという。

とりやま かくさい

▷ 鳥山 確齋

鳥山確齋は 1819（文政2）年、朝夷郡大川村（南房総市千倉町）に生まれた。本名は新三郎。網元出身の思想家であり、吉田松陰に影響を与えたといわれる。

里見氏につながる新田氏の末裔であり、幕閣に意見書を出せる立場にあった。江戸の京橋桶町に蒼龍軒という私塾を開いており、21歳の松陰が寄宿していた。松陰はペリー来航の際に密航を企てるが、未遂に終わり投獄された。鳥山は、獄中の松陰のために義援金集めに奔走したという。松下村塾を主宰し、高杉晋作や伊藤博文、山縣有朋らの人材を育成していった松陰の理念には、激動の時代を生きる指針を鳥山確齋から学んだといわれる。

38歳という若さで病死した鳥山は、後に安房先遣偉人として顕彰の会がつくられた。小谷仲治郎もその一人であり、学務委員を務めていた七浦小学校にも顕彰碑が建てられた。1986（昭和 61）年には、郷里の東漸寺に没後 130 年の記念碑が建てられ、現代まで語り継がれている。



とうきち

▷ 浅沼 藤吉

1854 年（嘉永 5）、根本の隣の滝口村（南房総市白浜町）生まれ、日本初の写真材料専門店「浅沼商会」を創業した。江戸に出て、日本橋の薬種問屋で手習いからはじめ、写真館相手に湿板写真の薬品を行商した後、1871（明治 4）年に 18 歳で東京呉服橋に浅沼商店の看板を上げた苦労人である。福原有信の 4 歳下で、親戚筋といわれる。

海外の高価な写真機であっても、安価で良質な国内産印画紙の需要が増えると見越して、積極的に海外からの情報や新技術を導入した。写真台紙の国産化を進め、京都や大阪支店を開き、宮内省の写真材料の御用係も務めたという。当初は輸入していた乾板の製造会社を興し、雑誌『写真新報』を創刊。革新的な製品を次々と生み出して。1900（明治 33）年パリ万博に出品し表彰されている。シベリア、東インド、南洋などにも自社製品を輸出するなど、写真材料・機器の製造・販売で写真工業界をリードした。



Report 祝！ JACL（全米日系アメリカ人市民連盟）モンレー会館 建設 100 周年

明治期より渡米し小谷源之助らは、乾鮑（干シアワビ）や缶詰工場などの事業に成功しました。モンレーを訪問し、日本人らの活躍に感銘を受けた浅香宮夫妻からの下賜金と、アワビ事業の収益などをもとに、1926（大正 15）年に日本人会の集会施設が建てられました。

現在の JACL モンレー会館で、地下にはヘリテージセンター（歴史資料室）があります。学芸員のティム・トーマス氏は日本の伝統的な乾鮑を展示したいと希望していました。安房では古代より特産として熨斗鮑を京に奉納していました。

そこで、2026（令和 8）年 5 月 2 日に開かれた JACL モンレー会館 100 周年記念式典に、本物の熨斗鮑がついた熨斗袋と乾鮑を安房文化遺産フォーラムから寄贈しました。友情の証が、またひとつ増えました。

モンレーを訪問される方はぜひ見学してみてください。



In 1926, the Nihonjinkai (Japanese Association) organized and funded the land purchase and construction of the hall.



◆ 映画『世界一の夕陽と生きる』上映 @東京 予約 cinemabox81@gmail.com

6月6日(土) 19:00~

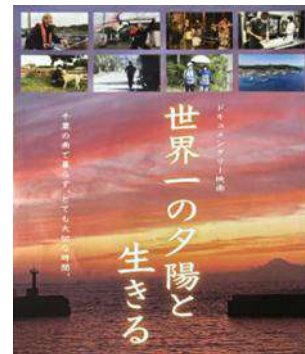
渋谷区文化総合センター大和田伝承ホール (渋谷区桜丘 23-26)

6月7日(日) 13:45~

日比谷図書文化館コンベンションホール (千代田区日比谷公園 1-4)

鑑賞代: 一般 1,500 円 大学生以下・シニア・障害者 1,000 円

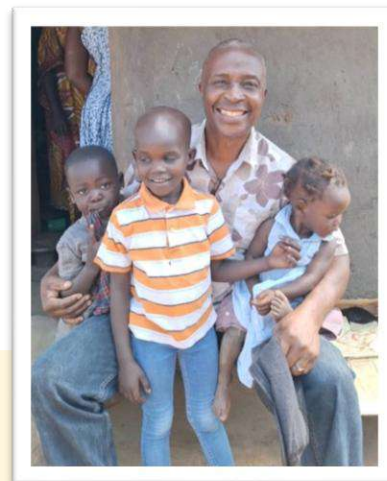
館山で撮影された美しく心温まる映画。安房文化遺産フォーラムも撮影協力しました。都内在住の方は、この機会に ぜひご鑑賞ください。



Report CUFU (ウガンダ意識向上協会) より支援金のお礼とウガンダの近況報告

1994(平成6)年に安房南高校の平和学習から始まったウガンダ支援交流は、学校統合や廃部により3校にバトンが渡され、現在は、私立安房西高校JRC部が継承し8人の部員が活動しています。

安房文化遺産フォーラムが窓口になって「安房平和のための美術展」などの市民活動が支援の手をつなぎ、32年目を迎えました。カウンターパートである CUFU (ウガンダ意識向上協会) 代表のステュアート・センパラ氏より、寄付支援のお礼と近況報告のメッセージが届きました。



皆さんはお元気でしょうか。安房文化遺産フォーラムを通じて、市民の皆さんから毎年贈られる支援はとても大切な資金です。私たちは、それが正しい価値で使われることを重視しています。

自給自足を旨としたカウム農場の管理棟として、皆さんの支援で建てている「綾子記念館」は、愛沢伸雄さんの亡くなった娘さんの名をつけました。長い年月がかかりましたが、ようやく建物の構造が完成し、屋根に鉄板を取り付けることができました。現在は、正面玄関のドア、窓、内外装の漆喰塗り、天井や床の仕上げなど、最終段階における様々な課題に取り組んでいます。神の恵みにより、ひとつずつ着実に進んでいくことでしょう。

私たちがお世話をしているウガンダ北部のメデ村は、今も孤児や貧困家庭が多く、クリスマスには食料を配ることができ、笑顔があふれました。子どもたちの新学期の準備もできました。

首都カンパラからメデ村までは 350 km 離れており、劣悪な道を往復しているワゴン車は、2017年に安房の皆さんがクラウドファンディングで寄贈してくださった中古車です。9年経ちますが、定期点検と丁寧な手入れによって、車はよい状態を保っています。今年は皆さんからの寄付により、4本のタイヤを取り換え、エンジンオイルやフィルター、トランスミッションフィールドなどの交換、グリス塗り、スプレー洗浄などのメンテナンスをすることができました。

このように、皆さんの支援のおかげでプロジェクトの進捗状況を報告でき、とても嬉しいです。心より感謝申し上げます。皆様の祝福をお祈り申し上げます。

2026.3.30 CUFU スチュアート・センパラ

